

平成 21 年 5 月 30 日現在

研究種目：基盤研究（C）  
 研究期間：2005～2008  
 課題番号：17520215  
 研究課題名（和文） ポストコロニアル的観点から考察した日英『ガリヴァー旅行記』図像にみる少年性  
 研究課題名（英文） Post-colonial Interpretation of Boyishness as Seen in Japanese and English Illustrations of *Gulliver's Travels*  
 研究代表者  
 千森 幹子（CHIMORI MIKIKO）  
 山梨県立大学・国際政策学部・教授  
 研究者番号：20236821

## 研究成果の概要：

本成果の概要は、（1）英仏版『ガリヴァー旅行記』挿絵本（1727年から1970年代）及び日本版『ガリヴァー旅行記』邦訳・挿絵（1880年の初訳から1970年代）の収集複写デジタル資料作成（2）その欧米版資料のオリент表象（特に、日本表象）とポストコロニアリズムとの関連説明（3）ポストコロニアル的観点からの日本軍国主義・少年教育と『ガリヴァー旅行記』邦訳図像の関連説明（4）日英比較図像学的観点からの西洋挿絵の日本版図像への影響説明（5）日本版『ガリヴァー旅行記』図像の独自性説明（6）その成果発表に、要約される。

## 交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	2,100,000	0	2,100,000
2006年度	1,000,000	0	1,000,000
2007年度	500,000	150,000	650,000
2008年度	100,000	30,000	130,000
年度			
総計	3,700,000	180,000	3,880,000

## 研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学

キーワード：日英比較文化 英文学 表象文化 国際情報交換 イラスト ジェンダー ポストコロニアリズム オリент

## 1. 研究開始当初の背景

国内外の関連する研究の中での当該研究の位置づけを、次のように判断し、当該研究の学術的な特徴・独創性を確認し、研究申請と研究を行った。

（1）『ガリヴァー旅行記』図像に関する研究：

先行研究は、1990年に出版された John Sena の論文 “*Gulliver's Travels and the Genre of the Illustrated Book*” (*The*

*Genres of Gulliver's Travels* 収録) 1本のみである。Senaの論文が、主として英仏版の主要挿絵画家のスウィフト作品解釈について論じているのに対し、本研究はイギリス版『ガリヴァー旅行記』図像をポストコロニアル的観点から論じる他に例を見ない独創的な観点にたつ。

（2）『ガリヴァー旅行記』の受容史研究：先行研究としては、原昌の「『ガリヴァー旅行記』移入考」『比較児童文学論』（1991）と

申請者による「初山滋と Arthur Rackham - Gulliver's Travels 図像における日英比較 -」(『日本ジョンソン協会年報 第 21 号』、1997)がある。

原の研究が、明治～戦後への概観的受容史であるのに対し、本研究は図像と文字テキストの両面から、日英両テキストをとりあげて、分析を行う、はじめての本格的な『ガリヴァー旅行記』翻訳と図像に関わる受容史・日英比較美術研究・比較社会政治研究である。

(3) 国際的な評価：

本研究が研究手法を継承発展した申請者による先行研究“Sense in Nonsense: The *Alice* Books and Their Japanese Translators and Illustrators” (イースト・アングリア大学、博士論文、2003)の国際的な評価：「極めて独創的な観点と分析による翻訳図像におけるカルチュラルスタディー」(主査: Bush 教授)「いままで試みられなかった斬新な日本文学文化批評、研究書」(副査: Dodd 博士)博士論文の口頭試問。

ケンブリッジ大学の John Harvey 博士とイースト・アングリア大学の元指導教授 Clive Scott 教授から共同研究の内諾をえる。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、ポストコロニアル的観点とジェンダー論(とりわけ「少年」的観点)から、イギリス文学作品である『ガリヴァー旅行記』邦訳と日英図像テキスト、及び、その作品が生まれた日英の政治的時代的文化状況、分析比較することにある。

具体的な目的は次の4点にまとめられる。

(1) 現在まで未整理のイギリス版『ガリヴァー旅行記』資料と、日本版『ガリヴァー旅行記』資料(主として明治から大正)に関する資料収集・複写・デジタル・インデックス化。

(2) イギリスの共同研究者(Harvey 博士と Scott 教授)と、表象論、文学と図像、イギリスの植民地政策と近代化に関する共同研究をおこなう。

(3) 研究成果発表：

日本の初期『ガリヴァー旅行記』翻訳挿絵研究(明治から大正半ばの児童文学雑誌まで)

日本の少年教育やポストコロニアル的観点から考察した明治～大正期の翻訳図像研究。具体的には、明治期の片山平三郎の初訳(明治13年)から巖谷小波の翻案(明治32年)及び、大正期の平田禿木邦訳(岡本帰一画 大正10年)と児童雑誌(「赤い鳥」や

「少年少女譚海」等)などに掲載された翻訳図像を、対象とする。

ポストコロニアル的観点から見るイギリス版『ガリヴァー旅行記』図像に関する研究成果発表

## 3. 研究の方法

(1) まず、研究計画の第一歩である、日英版『ガリヴァー旅行記』挿絵に関わる資料収集、文字および画像テキスト複写とデジタル化、インデックス化

収集方法：

- 購入：図像資料は、色調手触り等を検証するためできる限り購入。
- 資料所蔵図書館での調査/複写。  
英国: British Library (London) Bodleian Library (Oxford) など  
アメリカ: Library of Congress など  
日本: 国会図書館、国会こども図書館、都立多摩図書館、大阪府立国際児童文学館、成田山仏教図書館など

(2) 機器購入：

大容量のノート型コンピューター、軽量のスキャナーなどの研究環境整備。

(3) 海外共同研究者との共同研究：調査収集したデータをもとに、共同研究者との共同研究により、本研究に広範囲重層的な視点を提供する。

- ケンブリッジ大学 Harvey 博士(英文学、文学テキストと図像研究の専門)『ガリヴァー旅行記』と英国植民地政策を扱う本研究においては、英文学、イギリス図像に対する同氏の見識は不可欠である。
- イースト・アングリア大学 Scott 教授(映像研究、ヨーロッパ文学)『ガリヴァー旅行記』図像に、英国にとどまらぬヨーロッパ的広義な視点を提供するとともに、挿絵に映像芸術という重層的な視点を提供。

(4) 研究資料の分析：

収集された画像・文字資料の分析

欧米版画像・資料：初版(1727年)～1970年代

日本版画像邦訳資料：初版(1880年)～1970年代

(5) 成果発表

## 4. 研究成果

(1) 資料収集・整理・デジタル化

イギリス版（一部フランス・ドイツ・オランダ・アメリカを含む）『ガリヴァー旅行記』画像の収集、整理（初版～1970年代）：102種

日本版『ガリヴァー旅行記』邦訳画像の収集、整理（1880年から1970年代まで）：61種

複写した資料は、ほぼすべてデジタル資料に変換。購入資料は、40パーセント程度、デジタル化。残り60パーセントのデジタル・インデックス化は、今後の課題。

（2）イギリスを中心とした欧米挿絵102種におけるオリент表象のデータ収集解析。

具体的には、欧米『ガリヴァー旅行記』図像におけるオリент表象を4地域（中東表象、中国表象、日本表象、アフリカ表象、その他の地域）に、分類分析した。

#### 中東表象

版数が多く、表象は第一航海記・第二航海記に集中。また、1782年から1970年代までと、長期間にわたり表象される。

[場面別の版数]

第一航海記：14種

第二航海記：16種

第三航海記：1種

第四航海記：0種

なお、上記の資料を分析した、イスラム表象に関する詳細な研究成果は、今後の論文・著書で論じる予定。

#### 中国表象

第一航海記：2種

第二航海記：3種

第三航海記：12種

第4航海記：0種

出版時期は、1864年～1951年。

なお、上記の資料を分析した、中国表象に関する詳細な研究成果は、今後の論文・著書で論じる予定。

#### 日本表象

第一航海記：2種

第二航海記：1種

第三航海記：4種

第4航海記：1種

出版時期（1864年～1953年）

#### アフリカ描写

19世紀末から20世紀にかけて、3種類

その他、インド表象、未開国表象などはゼロ。

（3）オリент表象分析によって、解明されたオリент表象の特徴：

18世紀から現代に至るまで途切れずに出版されているイスラム表象は、ほぼ第一・二航海記に限定されている。

中国表象と日本表象の出現年代は近いが、版数は中国版が圧倒的に多く。中国表象は第三航海記に集中している。一部、日本と中国のイメージの混乱混在がみられる。

オリент表象としてはイスラム・中国・日本の国々が際立っているが、一部アフリカ表象もみられる。しかし、インドやその他のオリент諸国の表象は皆無である。

（4）日本表象がみられる英仏6種の挿絵の年代別リスト：

1864年、T.モートン（Morton）挿絵（英）

1884年、V.A.ポワゾン（Poirson）挿絵（仏）

1900年、ハーバート・コール（Herbert Cole）挿絵（英）

1914年、チャールズ・コーブランド（Charles Copeland）挿絵（英）

1929年、レネ・ブル（René Bull）挿絵（英）

1953年、ジャック・マチューズ（Jack Matthews）挿絵（英）

（5）『ガリヴァー』図像における日本表象の特徴：

日本描写は、中東・中国に比べ、その種類も少なく、1884年のポワゾンと1900年のコール版が中心である。この時期は、日清戦争、日英同盟によって日本が完全に文明教化されたアジア最初の国として世界に範をたれた時期に当たり、いわば、「アジアの文明化」をいち早く実現した極東の小国日本への関心が一気に増した時代である。

いわば、『ガリヴァー旅行記』図像におけるアジア表象は西欧の帝国主義政策と深く関連がある事が解明でき、本申請テーマである、ポストコロニアル的観点からの『ガリヴァー』図像分析の独創的な視点が、実証される結果となった。

日本表象と中国表象の区別が曖昧であり、一体化しつつ、分化、融合していることが多い。そこに西洋の帝国主義国からみたアジア観、日本と中国への認識の変容が看破できる。

英仏図像における日本への認識の相違がみられた。具体的には、『ガリヴァー旅行記』図像史のなかでは、フランスのポワゾンがも

つとも忠実に日本の人物事象を精緻に再現していることから判断して、フランスの日本文化芸術への関心理解の深さが伺える。

また、他の英国の画家が第三渡航記の愚かしい抽象観念に没頭しているラピューター人や非実用的な実験を行うラガードの学者を揶揄的に日本人に擬えているのに反し、ポワソンだけが第一渡航記のリリパット人を日本人に喩えている点、日本文化への敬意、小さい身体でアジアの雄として急速に先進国の仲間入りを目指す日本への驚異と尊敬の眼差しがみられると判断した。

以上、『ガリヴァー旅行記』における日本表象の詳細は、投稿中の拙論、「『ガリヴァー旅行記』図像とオリент 英仏挿絵に見る日本表象を中心として」『十八世紀イギリス文学研究4』（開拓社、2010年出版予定）を参照。

(6) 日本の植民地政策と初期『ガリヴァー旅行記』邦訳・挿絵研究(明治期)

明治期の『ガリヴァー旅行記』邦訳・図像、12種の分析を行った。その成果は次の2点に要約される。

明治翻訳のなかから重要な邦訳挿絵本5編 片山平三郎訳『驚瓏嶓児回島記』(1880)、大久保常吉『大人国旅行記(南洋漂流)』(1887)、島尾岩太郎訳『政治小説 小人国発見録』(1888)、巖谷小波編『小人島(ガリバア島廻上編)』筒井年峰絵(1899)、巖谷小波編『大人国(ガリバア島廻下編)』筒井年峰絵(1899) に関わる下記の成果をえた。

(i) 片山平三郎訳『驚瓏嶓児回島記』(画家名が無記載)の石版画は、イギリスの挿絵画家、T. Morton の模写であると解明した。この研究成果は、拙論「大正日本の『ガリヴァー旅行記』図像」(2007年)と国際学会での口頭発表「Images of Gulliver as Seen in Modern Japanese Illustrations」(2005)で、国内外へ発表した。

(ii) 島尾岩太郎訳『政治小説 小人国発見録』(画家のサイン:「潔」「K.N.」)の挿絵は、イギリスのルトリッジ社から出版されたE.J. ウィーラー(Wheeler)の彩色挿絵が挿入された『ガリヴァー旅行記』版にそえられた白黒挿絵の模写であることを調査発掘した。この白黒図版には、“E. Forest” “Pouget” “E.F.”のサインがあるが、画家名が不明である。本成果は、「明治の『ガリヴァー旅行記』とポストコロニアリズム」『翻訳文学総合辞典 第2部 日本における翻訳文学』(大空社・ナダ出版センター、2009年出版予定)で、発表される。

(iii) 巖谷小波編『小人島(ガリバア島廻上編)』筒井年峰絵、巖谷小波編『大人国(ガリバア島廻下編)』筒井年峰絵(1899)

筒井年峰の挿絵は、特定の西洋あるいは先行画像の模写ではなく、総体的に筒井独自の作品であり、日本人画家が創作した日本初の『ガリヴァー旅行記』図像といえる。

先行の西洋挿絵の影響を断片的に示す要素(たとえば、構図や描写、作品解釈などにおいて、フランスのJ.J. グランヴィル版から何らかの着想をえたと推論できる点など)もあるが、直接的な影響を立証することはできない。

故に、筒井の図像は、作品解釈においても芸術的な完成度においても、日本における初めての本格的かつ独創的な図像であると結論づけた。特に、平面描写、装飾性、色彩、意匠性、テーマ表象の象徴性など、日本美術の技法と人物や事象の西洋描写が融合した作品となった。

要するに、筒井の『ガリヴァー旅行記』図像は、従来の日本版図像と異なり、西洋図像の模倣を超え、構図や視点を大胆に変更し作品解釈に新境地を開くとともに、日本美術の伝統や意匠を駆使した芸術的な香りの高い作品であると、解明した。

ポストコロニアリズムの観点から見た明治の『ガリヴァー旅行記』邦訳

明治の『ガリヴァー』邦訳、特に、巖谷小波の『小人島』『大人国』をとりあげ、日本の帝国主義政策と少年教育という明治日本の思想のかかわりについて考察した。

巖谷の『世界お伽噺』に収録された『小人島』『大人国』は、子ども特に少年のための初めての翻案であり、日本の読者がスウィフト原作を、大人の風刺文学から子どものためのお伽噺へと読み解く分岐点となった、高い完成度をもつ文学作品として、明治の『ガリヴァー旅行記』邦訳史のなかに位置づけられる。

巖谷翻案の特徴を、四点 (1)大胆な原作からの変更や省略によるテーマ統一(戦争を中心とした冒険物語である第一部、巨人と小人というコントラストによる空想冒険物語である第二部)(2)少年の海外に向かう勇敢さや冒険心を鼓舞する編集方針(3)楽しく分りやすい翻案(4)従来の勸善懲悪を廃し、世界列強に肩を並べる日本の植民地拡大にそった日本の少年育成をめざす翻案 があると、解明した。

以上の(6) の成果は、研究代表者による国際学会発表:「Images of Gulliver as Seen in Modern Japanese Illustrations,」The First German-Japanese Conference on

Jonathan Swift, (立正大学 2005.10.30)と著書「明治の『ガリヴァー旅行記』とポストコロニアルリズム」『翻訳文学総合辞典 第2部 日本における翻訳文学』(2009年予定)で成果発表される。

以上、ポストコロニアル観点からの『ガリヴァー旅行記』邦訳・日英比較図像研究として、本研究は今まで試みられていない独創的な研究として、すでに、国内外で評価されはじめている。

(7) 近代『ガリヴァー旅行記』邦訳・挿絵研究(大正期)

本成果は、『ガリバア旅行記』図像に関する初めての研究成果であり、すでにその成果は、拙論『大正日本のガリヴァー旅行記』図像 岡本帰一と初山滋」(『図説 児童文学翻訳大事典』第4巻収録)で公開している。

以上の研究成果「大正日本の『ガリヴァー旅行記』図像」について、比較出版美術の碩学上笠一郎は「ここまでの研究は今までほとんどなかったですね。そういう意味で、全体として翻訳児童文学の研究を大きく進めた」(『週刊読書人』2007)と、研究の先取性を高く評価した。

岡本帰一の『ガリヴァー旅行記』図像研究(平田禿木訳『ガリバア旅行記』 富山房、1921)

本研究では、岡本帰一がウィリー・ポガーニー(Willy Pogany)の挿絵を参考あるいは模写をした事実をつきとめるとともに、大正時代の子どもの読者が理解し親しめる挿絵を創成した岡本の創意工夫についても論じている。

初山滋の『ガリヴァー旅行記』図像研究(鹿島鳴秋「ガリバー譚」『少年少女譚海』1921-1922)

本研究は、初山滋の『ガリヴァー旅行記』図像と日英挿絵に関わる研究成果である。まず、欧米の挿絵との比較研究を行い、明治から大正にいたる文化社会の変遷と欧米挿絵の影響、さらに、初山の作品解釈と日本図像としての独自性を解明した。

具体的には、初山は、岡本とおなじように、ウィリー・ポガーニー(Willy Pogany)の挿絵を参考にしながら、画面処理や構図、描写、さらに色彩処理の大胆さや革新性、独特の幻想性により、極めて近代的で芸術的レベルの高い『ガリヴァー旅行記』図像を創作したと結論づけ、大正時代における初山の『ガリヴァー旅行記』図像の近代性と独創性を解明した。

その成果は、拙論『大正日本のガリヴァー旅行記』図像 岡本帰一と初山滋」(『図説

児童文学翻訳大事典』第4巻収録)で公開している。

大正期の『ガリヴァー旅行記』邦訳研究  
大正期の鹿島鳴秋の邦訳「ガリバー譚」(『少年少女譚海』連載、1920-1921)、野上豊一郎の「馬の国」(『赤い鳥』連載、1921)平田禿木訳『ガリバア旅行記』(富山房、1921)から、清水繁訳註『ガリヴァの旅行記』(東京研究社、1929)までを、調査分析しその特徴を研究した。

本研究着手後、『ガリヴァー旅行記』の邦訳研究として、2本の論考 榊原貴教の「『ガリヴァー旅行記』に見る翻訳社会史」(2005)とMihoko Tanaka(田中美保子)の「Japanese Little People Who Have Lost Their Nationality through the Translation and Influence of British Fantasy」(2005)が、公表された。前者が、代表的な『ガリヴァー旅行記』邦訳の序文や解説を使い翻訳者の作品観の変遷をまとめているのに対し、後者は、明治の『小人国』『大人国』邦題による、日本の小人言説の変化変貌を論じている。

他方、研究代表者が論じた鹿島の翻案は、代表者によって初めて調査批評された翻訳である。本研究成果は『子供の本・翻訳作品大辞典 第4巻 研究編』で、公表、評価された。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 3 件)

千森幹子、「『不思議の国のアリス』の翻訳者丸山英観再考」、『山梨県立大学地域研究交流センター2007年度研究報告書』、34-46、2008年、査読無

千森幹子、「初期『不思議の国のアリス』翻訳にみる諸相(II) ジェンダーおよび少女の視点を中心として」、『比較文化研究』第79号、1-14、2008年、査読有

千森幹子、「初期『不思議の国のアリス』翻訳にみる諸相(I)」、『比較文化研究』、第72号、1-10、2007年、査読有

[学会発表](計 4 件)

Mikiko Chimori, 'Tove Jansson's Alice Illustrations,' Tove Jansson Conference, 24 March, 2007, Oxford University.

Mikiko Chimori,

'Oriental Illustrations of Alice,'  
ASH Colloquia, 26 September 2006,  
Clare Hall, University of Cambridge.

千森幹子、「『アリス物語』におけるノン  
センスの再構築と少女の表象」日本比較  
文学会東京支部 12 月研究例会、  
2005.12.17、東京大学

Mikiko Chimori, 'Images of Gulliver  
as Seen in Modern Japanese  
Illustrations,' The First  
German-Japanese Conference on  
Jonathan Swift, 30<sup>th</sup> October 2005,  
Rissho University.

〔図書〕(計 4 件)

千森幹子、『翻訳文学総合辞典 日本にお  
ける翻訳文学』、大空社・ナダ出版センタ  
ー、2009 年、総 27 ページ (掲載ページ  
未定)

千森幹子、『不思議の国のアリス～明治・  
大正・昭和初期邦訳本復刻集成～』、エデ  
イション・シナプス、2009 年、2150 頁。

Mikiko Chimori,  
*Tove Jansson Rediscovered*, Cambridge  
Scholars Publishing, 2007, 146 - 165.

千森幹子、『子供の本・翻訳作品大辞典  
第 4 巻 研究編』、大空社・ナダ出版セン  
ター、2007 年、98 - 120.

## 6 . 研究組織

### (1)研究代表者

千森 幹子 (CHIMORI MIKIKO)  
山梨県立大学・国際政策学部・教授  
研究者番号：20236821

### 研究協力者

John Harvey  
Reader, Faculty of English, University of  
Cambridge  
Clive Scott  
Professor, School of English and American  
Studies, University of East Anglia